

〈動向〉

第二回関学レインボーウィーク 「もっとカラフルな関学に！」を振り返って

阿部 潔

2014年度の人権教育研究室主催事業として、第二回関学レインボーウィーク「もっとカラフルな関学に！」を開催した。その内容は、図書館エントランスホールでの展示（開催期間2014年5月12日～16日）、映画『Call Me Kuchu ウガンダで、生きる』の上映（5月12日15時10分～17時00分、図書館ホール）、パネルセッション&座談会「第2回 関学の中のセクシュアルマイノリティ」（5月15日15時10分～18時20分、関西学院会館「光の間」）である。前年度に引き続き第二回目となるレインボーウィークを開催できたことは、人権教育研究室にとって大きな成果であった。以下では今年度の「レインボーウィーク」を振り返り、その意義と可能性について述べてみたい。

なぜ「ウィーク」なのか

先に述べたように、今年度のレインボーウィークは第二回目の開催である。だが、昨年度の諸企画は「ウィーク」としては不十分なものであった。その理由は、今年度同様に各種イベントを企画・実施したが、それら全体を通して一週間にわたりLGBTをめぐる人権の問題について提起し続けられたかを思い返すとき、幾つかの課題が残ったからだ。そうした反省を踏まえ、第二回目のレインボーウィークでは、一週間の期間全体を通して関学のキャンパスの至るところでLGBTについて多くの人々に考えてもらう機会と場所を設けることを目指した。LGBTを取り巻く関学の「風土」が必ずしも十分な

理解に満ちたものでなく、ときとして当事者たちに生きづらさを感じさせていることへの危機感と問題意識を出発点としてレインボーウィークが始められたのであれば、その「風土」自体に訴えかけることが必要不可欠である。私たちはそのように考え、レインボーウィークという期間限定プロジェクトを始めたのである。

目に見えるアピール：フラッグとステッカー

そうした目論見のもと今回実施したのは、「ウィーク」の趣旨を記したリーフレットとレインボーカラーのステッカーの教職員関係者全員への配付である。人権啓発に取り組む趣旨を明記した文書やリーフレットの配付自体は、大学での人権教育活動において珍しいものではないだろう。だが、それとあわせて「レインボーステッカー」を大々的に配ったことは、少しばかり革新的な試みであったと自負している。その趣旨は、ひとりでも多くの関係者にLGBTについて知ってもらい、さらに何かしらのサポートや共感の意思表示としてステッカーを身の回りの場所やモノに貼ってもらうことであった。結果的に「ウィーク」終了後にもキャンパスのさまざまな場所や関係者の身の回りでステッカーを目にする機会があった。たとえ一枚の小さなステッカーであったとしても、一人一人がそれを意思表示として掲げるという地道な取り組みによって変えていけることは、きっと数多くあるに違いない。

ステッカー配付と並ぶ今回の大きな試みとして、上ヶ原キャンパス正門横ならびに神戸三田キャンパス・アカデミックコモンズ前に一週間にわたり「レインボーフラッグ」を掲げた。毎朝、キャンパスに通学・通勤する人々の目にそれは止まったはずだ。レインボーフラッグへの反応は、きっと各人各様であったことだろう。喜ぶ者、驚く者、戸惑う者、不思議に感じる者。そして、もしかすると少しばかり憤った者たちもいたかもしれない。その反応がどのようなものであったにせよ、本学では2014年5月12日から16日の期間キャンパスが「レインボー」に飾られ、大学をあげてLGBTと人権の問題について考える機会と場を持った。それを象徴的に示すのが学内に掲げられたレインボーフラッグだった。

「知る機会」の広がり

それぞれのイベントには多くの人が足を運び、好意的な意見や感想がアンケートを通して数多く寄せられた。そうした参加者たちの声からは、レインボーウィークを通してさまざまな企画やイベントに触れることで、LGBT当事者たちが体現している「多様な性のあり方」について知識と理解が深まったことが窺い知れる。テレビ番組などを通じてLGBTという存在自体を知っていたとしても、いまだ多くの人にとってそれはどこか縁遠い存在として受けとめられているのかもしれない。だが、自らが日々暮らす大学という場で開催された「ウィーク」を通して、多くの人々はLGBTが実は身近な存在であることに気づいたに違いない。これまで気づかなかっただけで、LGBTの当事者たちは自分と同じこの関学という場所で日々を過ごしていた。そして、少なからぬ者たちが関学の「風土」の中でときとして息苦しさや生きづらさを感じていた。その事実気づく機会として、レインボーウィークは多いに力を発揮した。このこと自体は、大学における人権教育への取り組みの成果として喜ぶべきことだろう。当事者たちの苦勞や辛さをより多くの人々が知り、そのことへの認識を深めることは人権教育の基本だからだ。

だがしかし、LGBTをテーマに据えたレインボー

ウィークの試みには「より多くの人々」に知ってもらい関心を抱いてもらうことと並行して、それ以上に重要な試みが賭けられていたように思われる。それは関学という「風土」のなかで日々を生きる「ひとりでも多くの当事者」に、レインボーウィークの存在を知ってもらうことである。

潜在的な当事者

LGBTであればほかのテーマであれ、何かしら人権に関わる事柄の当事者は、そもそもはじめから「当事者」として存在しているわけではない。当初は、ごくごく個人的かつ私的な違和感や居心地の悪さとして感じられる「なにか」が、周囲の人々との関わりや同じような感覚を抱く仲間との交流を通して自分だけでない「わたしたち」の問題として受け入れられるとき、人は「当事者」としての自覚を抱く。その点でも大学の「風土」は重要な位置を占めている。なぜなら、制度や組織とそこに関わる人々を大きく規定する「風土」が、なにかしらの違和感や人権に関わる問題として自覚／認識することを促し、それを問題視するようエンカレッジするものならば、その「風土」はきっと当事者にとって息苦しいものとはならないからだ。そこで人々は仲間たちと繋がり、周囲の者たちも理解を深めていけるだろう。だがもしも、それと対照的に「風土」が潜在的な当事者たちに孤立感や疎外感を抱かせ、自分のほかに「なにか」への違和感に苛まれる者などいないのではないか（実際はそうでないにしても）、との思いを強くさせるとする。するとその「風土」は、潜在的当事者にとってきわめて生きづらいものにならざるをえない。各種イベントに寄せられたアンケートの回答には、そうした潜在的当事者が日頃置かれている厳しい状況が窺い知れるものがいくつもあった。関学の「風土」のもとで少なからぬLGBT当事者はこれまで声を上げることはおろか、自らのアイデンティティへの自信や確証を持つことがきわめて難しかった現実が垣間みえるのだ。

人知れず苦しんでいる潜在的当事者に対して、レインボーウィークとはLGBTをめぐるより望まし

い「風土」を築き上げていくための試みであることを伝える／見せる／感じてもらうこと。これこそが「ウィーク」の大きなミッションであることは言うまでもないだろう。ともすると孤立感に苛まれ、自らの「性」への想いを話し／分かち合える仲間を持ちにいくと感じる人々がいるならば、その人たちに向けて「レインボー」の理念を信奉し共感を表明する関係者が関学内にいることを示すのは、とても意義深い実践であろう。昨年度と今年度の二回にわたるレインボーウィーク開催によって、そうした呼びかけがいくらかでも果たされた。このことは必ずしも人目に触れる性格のものではないけれど、「ウィーク」開催の大きな成果であった。大学全体の取り組みとしてレインボーウィークを実施し、そのことで潜在的当事者が仲間たちとつながり、自分自身の居場所を関学の中に少しでも見出すことができたとしたら、それはより良い「風土」を作り上げていくうえで意義ある一歩であろう。

二つの「目標」の緊張関係と可能性

だが、ここまで述べてきた「ウィーク」に託された二つのミッション——一方で「より多くの人々」にLGBTについて知ってもらい、他方で「ひとりでも多くの当事者」にレインボーウィークをキッカケに繋がり仲間を提供する——は、必ずしもスムーズに調和するものではない。前者の目標を追求することは、ある面で当事者以外の人たちの関心を高めはしても、その「意図せざる帰結」として潜在的当事者にとってより困難な「風土」を作り上げないともかぎらない。なぜなら、「性」の問題をめぐる自分たちとは異なる「他者」への共感や理解の必要性が声高に唱えられるとき、多くの人にとってLGBTは自分とは異なる「あの人たち」の問題と看做されてしまいがちだ。その結果、LGBTを他人事ではなく自分事として生きている潜在的当事者は、皮肉にも周囲との違いを殊更に感じ取り自らの声を発しにくくなることだろう。他方で、後者の目的をもっぱら追い求めることで、たとえその意図がなくともLGBTというイシューは当事者だけに閉ざされ、

多くの人々にとってどこことなく関わりにくい事柄になりかねない。なぜなら、非当事者がLGBTと人権について語ることは、どこか失礼であり不遜でさえあると感じられてしまうからだ。

このようにレインボーウィークが目指す二つの目標を同時に果たすことは、実のところそれほど容易ではない。だがそれは、必ずしも両立不可能でもないだろう。二つの目標をともに推し進めていくうえで、次年度以降のレインボーウィークになにが求められるのか。それを考えるヒントになると思われるイベントについて触れることで本稿を終えたい。

冒頭に記した三つの企画のほかに、実は今回のレインボーウィークでは「番外編」とも呼ぶべきイベントが実行された。それは、学生・教員・職員・その他の有志たちによる中央芝生でのライブ演奏である。「もっとカラフルな関学に！」とのスローガンに見合う楽曲を選び、集まった人々のあいだで合唱がなされた。生憎の小雨まじりの天候のもとSNSなどを通じてイベントを知った多くの人が集い、5月15日の昼休みの時間帯、中央芝生は活気と熱気に溢れた。こうした半ば「ゲリラ的」に敢行されたライブイベントには、今後に向けたひとつの可能性が垣間見えるように思われる。時計台とともに関学のシンボルである中央芝生。日々のキャンパスライフにおける見慣れた場所／時間に突然生じた、小さなハプニング。それに触れた関学に集う者たちはきっと、自らの日常生活に生じた小さな裂け目を不思議に、そしてどこことなく面白く感じ取ったことだろう。きっとそれは、日々さして意識することなく自らが身を置く「風土」を見つめ直し、それを練り直していくキッカケとなるに違いない。そうしたささやかな企ての積み重ねと連続があってこそ、毎年ごとに「ウィーク」を開催することに意義があると言える。

2015年度レインボーウィークの企画・準備はすでに始まっている。今年の5月にはふたたび関学の至るところで「レインボー」が咲き乱れることだろう。